今昔物語 第7話

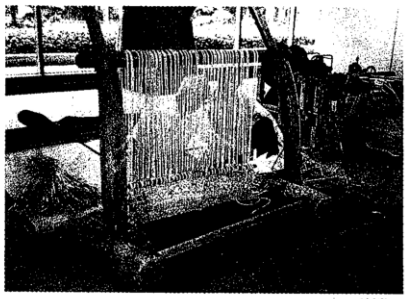
筵織り

筵織りは、筵を織るのに用いられた古い型の機で、「おさ」を起こしたり、寝かしたりして横木に掛けた細い藁縄の口を交互に開け、この間に「緯差し」(竹製)で生藁を引き通して織ります。単純な手作業の繰り返しですが、それなりの経験を要する根気のいる仕事です。今では、本市でも筵織りのできる人は、今回お話を聞いた西川定男さん(三箇5丁目・85歳)を含め、極めて少数になっています。

西川さんは、21歳の時からお父さんと二人一組になって農閑期である冬の2・3月の毎夜5時ごろから8時ごろまで、縦7尺(約212センチ)横幅3尺(約91センチ)の筵を3枚も織っていたそうです。

しかしながら今では、この大東市平野部の農家で行われてきた脱穀が済んだ後の稲藁を利用した筵作りも、昔からの人手による農作業から機械化農業への転換などにより、材料であった藁が入手困難になったという事情や、ビニール製品の敷物の普及でまったく見られなくなってしまいました。

※緯糸を織り込む際に使用する櫛形をした道具



側柱に「昭和参年五月中旬、深野北、西川定次郎」と墨書がある筵機

今昔物語 第8話

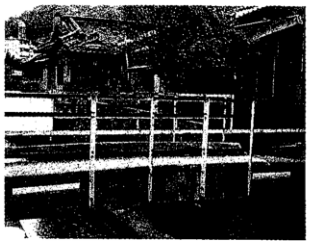
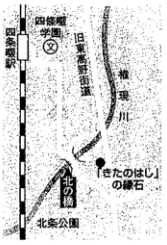
権現川に架かる石橋

「北条2丁目、旧東高野街道沿いの側溝の縁石(花こう岩)に『きたのはし』と彫り込みがしてあるんです」と北条2丁目在住の合川昭夫さん(72歳)と豪さん(67歳)ご兄弟から話を聞きました。

この縁石(橋の部材)を用いた石橋に関する記述は、かつて北条地区の管轄庁だった四條村の管轄沿革に、「北条地区の権現川に架かる橋は、北の橋、乾橋、木田橋、市場橋、(中略)石造りなり」と記載されています。

北の橋は、北条2丁目(当時の北の町)の人が私財を投じて架けたものです。このころ、関西の架橋事業は、公費ではなく、個人または共同出資による私費による場合が多かったのです。

住民の知恵からか、北の橋の石材は、捨てられず縁石として再利用されています。

現在はコンクリート橋に変わり、同時に周囲の環境も田んぼから住宅へと変化しています。

しかし、付近の人々が日常この橋を渡り、JR四条畷駅への近道として重宝していることに変わりはないでしょう。